

阿育王寺の護塔神について -泉州開元寺東塔「薩訶朝塔」図の検討を通して-

工藤裕司（同志社大学）

現・浙江省寧波市に所在する阿育王山広利寺（以下、阿育王寺）は、阿育王によって造られた八万四千の真身舍利塔の一を祀る靈地として知られる。日本においては重源や栄西、道元らが入宋の際に訪れており、中国内外で篤い信仰を集めた。これまでの研究においては、阿育王の八万四千塔の造塔譚や、同地で阿育王塔を発見したとされる劉薩訶について、あるいは阿育王の造塔に倣って造られた錢弘俶塔など、様々な切り口から同寺の舍利信仰について検討がなされている。本発表ではこれらの研究を踏まえたうえで、南宋代における阿育王寺の護塔神について考察を加える。

まず阿育王寺の護塔神を描いた作例として泉州開元寺東塔「薩訶朝塔」図を紹介する。福建省泉州市に所在する泉州開元寺の東塔は全高四十八メートルの石造八角五重塔で、嘉熙二年（一二三八）の着工から十二年をかけて完成した。各層壁面に仏菩薩や天部、聖僧の図像を配すほか、その基壇部には計四十のレリーフが施されており、「薩訶朝塔」図はこのうち西北面に表される。画面中央には岩上で輝く舍利塔を、その右側には柄香炉を持って跪坐する男性を描くほか、舍利塔の下で飛び跳ねる鰻の姿と、画面左方で侍者を連れ、左手を額の上に掲げる男性立像を表す。発表者はその像容から、本図に描かれている鰻と男性立像が阿育王寺の護塔神である「靈鰻菩薩」および「大権修利菩薩」だと考える。

次に、以上の二神に係る史料を確認していく。靈鰻菩薩は古くは南山道宣が撰述した『集神州三宝感通録』にみえ、のちに呉越の僧贊寧が開宝五年（九七二）に『護塔靈鰻菩薩伝』を著し、宋代以降は贊寧の記述を元に複数の地方志で阿育王寺の護塔神としての言及が見える。大権修利菩薩に関しては、景定五年（一二六四）頃より阿育王寺の住持を務めた物初大観の語録『物初贅語』にて述べられ、同年に「大権菩薩閣」が寺内に造営されたことが記される。

続いて、建長元年（南宋・淳祐九年、一二四九）に入宋した心地覚心が阿育王寺に滞在した際の記録に注目したい。本史料や『物初贅語』の記述から、当代の阿育王寺にて靈鰻菩薩と大権修利菩薩が共に護塔神として位置づけられていたことを確認する。これらの護塔神や場面の描写から、「薩訶朝塔」図は開元寺東塔が建立され、同図が制作された当時の阿育王寺にみられた信仰を反映したものであることを指摘する。

最後に、東塔基壇部西北面のレリーフ群における「薩訶朝塔」図の位置付けを検討することで、同図に護塔神が描き込まれた意味について考えたい。西北面の六図はその画題から、阿育王の八万四千塔の造立と中国への舎利の伝来を描いていると考えられる。そうした一連の図の中で、阿育王寺の護塔神は中国に伝来した舎利の正当性を証明する役割があったことを指摘する。